

## 国土交通大臣賞（優秀賞）

### かけがえのない水

忘れもしない平成二十三年三月十一日。東日本大震災で私達の住む福島も大きな被害を受けた。恐怖に震える中、ライフラインが寸断され、蛇口をひねれば当たり前に出てくると思っていた水も止まってしまった。飲み水、料理、トイレ、風呂など普段の生活になくはならない水。数日もの間、行列に並んで給水車から分けてもらうことでしか手に入らなくなり、水のありがたみを身をもって感じた。

しかし、あれから四年。復興が進み日常を取り戻した今、時間の経過とともにあのありがたみ、水を大事にするという感覚が少し薄れてきたかもしれない。そんな私に改めて水の大切さを考える出来事があった。

昨年の秋、福島市中学生海外派遣団の一員としてオーストラリアで短期留学を経験した時のことだ。私が訪れたクイーンズランド州のブリスベンでは、数年前に大渇水があり、給水制限があるというのだ。ホームステイ先で

「シャワーの時間は短めに、五分位でね。」

と言われ、正直驚いた。豊かな自然、コアラやカンガルーが思い浮かぶこの国で、水不足というイメージがあまりにもかけ離れていたからだ。

実際に街並を見ても、高層ビルが立ち並び、緑があふれ、公園も多く川も流れていて自然の多い環境だった。現地で交流したスクールバディ達にもそれぞれの家庭の水事情を聞いてみた。すると、シャワーの時間制限があったり、浴室にバスタブはあるものの、大量のお湯を使いたくないとそこに毛布や衣服を入れてるそうだ。また、使った食器を洗わず洗剤の泡につけ、それをふきとるだけだったりと水に対する意識は日本とは全く違い、驚くばかりだった。

自分でも調べてみると、オーストラリアは人間が住む大陸の中で最も乾燥している地域であった。「本土の約八十パーセントは砂漠でできているということ」、「低降水量、高温の砂漠気候とみなせる地域が広く存在すること」。これらが水不足を引き起こす原因で経済と生活に深刻な影響

福島県 福島市立北信中学校 三年 遠藤 亮佑

を与えているということが分かった。その対策として政府が「未来のための水資源」という取り組みの一つとして給水制限というシステムを行っているのだった。

日本だと無限にあると錯覚してしまいそうな位の水。けれど、世界で分け合う必要不可欠な資源の一つであると考えさせられた。

またこの四月、修学旅行の班別自主研修先に東京都水の科学館を選んだ。水についてもっと知りたいと思ったからだ。科学館では、水の循環をたどり水の旅を体感することができた。自然の恵みを大きく受けていることを学び、環境に配慮することも大切だと認識した。またこの地球には、十四億立方キロメートルの水があると知られているそうだ。そのうちの九十五・五パーセントは海の水で陸の水はごくわずかだそうだ。しかもそのほとんどは南極や北極の水。利用できる水は、地球上の水のわずか〇・〇一パーセントしかないということを知り、改めて水の大切さを考え直す機会となった。

様々な経験をふまえ、自分に何か出来ることはないかと考えた。その時、母の行動が目についた。風呂の残り湯を洗濯に使い、米のとき汁を庭木の水やりとして使用していた。早速私もオーストラリアで経験した時のようにシャワーの時間を制限することにした。だからだとシャワーを浴びないおかげで時間も短縮できる。小さなことかもしれないが、私達のような未来を担う次世代が進んで行動を起こし、出来ることから始めていきたい。